

# 『新しい空間に』

拓斗

3073 文字

あらすじ

ずっと迷っていたことを決めるためにリフレッシュの旅に出た私。そこで思いがけない生物との出会いをしたことで、自分でも考えていなかった方向から気持ちの変化が起こります。心の整理ができ、身を置く場所やその状態の大切さに気付いて、大掃除をしながら今後の人生を新たに考え始めます。

「もう覚悟を決めなくては」

視線だけは動かさず、ため息のような深い呼吸をして私はつぶやいた。

旅先で出会った小さいけれど存在感ばっちりの白い生き物。

私をじっとみつめるその黒い瞳。

「えっと、この旅で何回君たちに出会ったかな……？」

驚きつつも5度目の遭遇で、私は少しだけ冷静を装って今度は小さく話しかけてみた。

縁起が良い、と言われている白いヤモリに、だ。

初対面は、離島へ来てホテルに着いた早々、手を洗おうとした私を蛇口の隣で静かに迎えてくれた。

ぎゃあっという私の驚きの声に、壁に移動したもののそこから動かなかった。気候から多く生息しているのは知っていたが、何回かここへ旅に来ていても白いヤモリに会ったのは今回が初めてだ。

「早く捕まえて！」

と主人に叫ぶが、なぜだか熱心にスマホを見ている。

「ちょっと！！」

キレ気味の私に、主人は笑いながらこちらへ来て言った。

「大丈夫だよ。今調べたら、白いヤモリは良いことを運ぶんだって。なにか危害を加えることもないからそっとしておいていいみたい。それと何かメッセージがある時にやってくるらしいよ」

「え？ そうなの？ そういえば縁起が良いっていうのは聞いたことがある気がする」

私もネットを覗き込んだ。

「漢字で書くと『家守』で、昔から家を守ってくれるんだ」

感心して私がそう言う白いヤモリはシュルシュルシュルと壁から降りてきた。

「きゃあ！ そうは言っても、慣れてないからちょっと怖い……」

「あ、なんか魂を運ぶとも書いてあるよ。もしかしてあのことかな」

まだスマホを見ながらのんびりと言う主人を私は冷静に見た。

「ネットのことなんてあてにならないんじゃない？」

私はそう吐き捨てるのとホテルのフロントに電話をかけて、白いヤモリを捕まえてもらうことにした。

すると白いヤモリはどこかへ行ってしまう、それからは部屋では見ることはなかった。

だが次の日から、レストランで朝食をとっている時、レジャーを終えて支払いをしている時、テラスで何気なく見た所、ふと視線を向けた先に白いヤモリがいてこちらを見て

いるのだ。それも主人がそばにいない時ばかりで私だけが見つけてしまう。そしてさすがに、5回目の遭遇となれば、主人の言ったことが頭によぎる。

そう、私はこの旅が終わったら、母親になる準備をしようかと考えているのだ。まだ決めたわけではない。忙しい毎日ではなかなか答えが出せず、なんとかひと段落ついたらリゾート地でリフレッシュしてじっくり心を決めようと、ずいぶん前から主人と話をしていたのだ。だから主人は白いヤモリを見て、魂を運ぶという言い伝えが気になったのだろう。新しい命がやってくるのかなと。

けれども、ただの偶然よ、と思う自分もいる。大事なことは自分で決めるのだから。けれど、余計なものがないまっさらな大自然の中にいると、こういうこともあるのかもしれないとも思う。

私は旅の終わりが近づいた頃、真っ青な海が見える素敵なジャグジーにゆっくりと浸かりながら考えることにした。美しい景色が見えるから、というよりは白いバスルームがとても清潔感があってすがすがしく、ここが一番落ち着きそうな気がしたのだ。

「もう覚悟する時なんだな」

体が温まるにつれて心もほぐれたのか、度重なる偶然を思い出しながらはっきりと独り言を言った。

考えなくたって心のどこかではわかっていることが実はある。慌ただしいけれど充実した仕事。日常で時々起こる不意な出来事。色々なことを楽しんだりかわしたり人生はどんどん加速して過ぎていく。そうしているうちに私は三十六歳になったのだ。

考えなければいけないことを、考えても答えのないことを頭の片隅に置きながら今日まで来た。子供を産むか産まないか。近年の女性が悩む事の一つだ。

迷う理由は沢山あった。今の時代、人生の選択肢が増えて似たようなことで悩む人の情報も多い。けれども自分と全く同じ環境で同じ性格の人なんていない。だから結局は自分で決めなくてはと思っていた。誰かや何かのせいにはしないために。

結婚はそこそそ早い方で、三十代前半では産むつもりだった。けれども母親になる自信がいつになっても持てなかった。でも私はいつまでそんなことを言っているんだろう。先延ばしにできることとできないことがあるんだ。答えを待っていたら時期を逃すかもしれないのに。

「覚悟しよう」

もう一度声に出して言うと、ずっと抱えてきた想いが全部溢れだしたように涙がこぼれた。

私は強めにシャワーの水を出して涙を、そして全身をただひたすら洗い流した。

水って不思議だ。私を温めて、癒して、何年もかけて積もった見えない心の汚れも一緒に流してくれるんだ。

とてもきれいに掃除された心地のよいバスルームで、私はぼんやりと思った。そして

ぐるりと天井から床を見渡して、そういえば忙しきにかまけて、バスルームはもちろん自分の家を隅々までじっくり掃除なんて長いことできていないなあと思った。体も住む場所も丁寧に綺麗にする時間はとても大切だと昔はよくわかっていたのに。

いい機会だから、帰宅したら大掃除をしよう。

一歩踏み出す決意をしたバスルームのように、ゆったり過ごせる空間にしよう。

私はすっきりとした気持ちでバスルームを出て部屋のドアを開けると、床を白いヤモリが勢いよく走ってきた。やっぱり驚いたが、最後まで登場してくれたことに笑ってしまった。

「すごいタイミング……これはもうこの気持ちを忘れちゃいけないってことよね。はいはい、わかりましたよ。もう悩むのやめましたよ」

私は、足元の白いヤモリにそう言って、旅を後にした。

そういうわけで4泊5日の旅を終えて自宅に帰った私は、大掃除を始めた。

まずはいらぬものを捨てることから。どんどん捨てて空いた場所をどんどん拭く。最後にただひたすら床を拭く。

もともと私は、掃除機をかけて床を綺麗にしたつもりが、それだけじゃない爽快感がある気がしていて、きっと空間の何かも綺麗になっているのだろうと想像していた。だから拭き掃除もしたらもっと気分が良いのだろうなと思いつつ、億劫で手を抜きがちだったので今回はここに力を入れることにした。

あーなんて気持ちがいいのだろう。

子供の頃は、学校で拭き掃除は当たり前だったし、家では手伝いで拭き掃除の後、年に二回ワックスを塗るのが決まりだった。夏休みに祖父母の家へ泊まりに行けば、素早く雑巾がけをするおばあちゃんをよく覚えている。それが終わるとおやつだったのだ。

自分だけのライフスタイルになって、拭き掃除もワックスもつい回数は減っていく。手抜きになっていることに居心地の悪さを感じなくなっていくのはあまり良いことではなかったなあ、つややかに光る床を見ながら感じた。

「人間は楽な方に流れていくって本当ね」

私は掃除ひとつから色々なことをしみじみと思い出した。ありがたいことに今は昔よりも簡単に掃除ができるような商品がたくさんあるのだから、もう少しやる気を出したっていいではないか。よし、これを機に少しずつライフスタイルを変えていこう。

ひと息ついて、窓から外に目をやると公園が見える。ちょうど整理されたばかりの公園で子供たちやママたちが楽しそうに遊んでいる。

さて、私のこれからの人生はどんなものだろう。母親になれるのかならないのか。

未来はわからないけれど、すっきりとしたこの部屋の新しい空間には何がやってくる

のか、わくわくしながら私は言った。

「赤ちゃん、よかったら来てください。少しずつ準備始めてますからね」

私はそれぞれの人生を、ゆったりとした気持ちで思い描いた。